

偶然に見てしまった「白の闇」

2月5日の午後、私は疲れて目的もなくテレビをつけて横になった。番組は半分以上経過していたが、目は釘付けになった。そして”しまった”録画しておけばと思った。再放送はいつだろうと調べてみたら、その番組はすでに1月3日に放映されて再放送そのものであった。ともかく見なければ、見たいと、調べNHK + α にたどり着いた。番組名は「100分でパンデミック論」であった。

4人のパネラーが推薦する4冊の本が紹介され、自由な討議があった。それらの本を通してこの新型コロナのパンデミックが明らかにした様々な問題をどう捉え、意味付け、将来やってくる、更に大きなパンデミック（温暖化、地殻変動による空気、水、天然資源の枯渇等々）に人類はどう向き合って生きるのかという問題を提起する狙いがあったと私は思う。番組の4人目の高橋源一郎さんが紹介したのは「白い闇」で既に映画化（ブラインドネス）されている。私は未読であったのですがすぐさま購読した。一気に読んだ。この状況下でかなり売れている本である。

著書と著者について

著者 ジョゼ・サラマーゴ (1922~2010)

ポルトガルの作家、

著書・「白の闇」1995年作・ポルトガル語の原題は「見えないことについての考察」この本により1998年ノーベル文学賞を受賞。スウェーデンの王立アカデミーは「想像力、憐れみ、アイロニーに支えられた寓話によって我々が捉えにくい現実を描いた」と述べている。極限状態における人間の理性と感情、個人の尊厳と公権力の冷酷さなど作者は余すところなく「人間」を描き切っている。

日本語翻訳は2001年（雨沢泰訳 日本放送出版協会発行）

2004年には「見えることへの考察」を発表。著書多数。

「白の闇」は2008年にフェルナンド・メイレス監督によって『ブラインドネス』として映画化された。

本書には章付も目次もないミステリアスかつサスペンスな構成になっているが、私の理解のために章付を試みた。文中著作からの引用は各ゴチ12p、私の解説は明朝体12pとした

奥付に次の言葉が記されている。



「見えるなら、よく見よ。よく見えるなら、じっと見よ」

(訓戒の書より)

第1章 最初に目が見なくなった男 (p7-23)

物語の始まりは、どこの街角にでも見られる片側3車線の交差点での出来事で始まる。

「黄色がついた。赤信号にならないうち

に、前にいる二台の車が加速した。横断歩道にある緑色の男の絵が明るくなった。待っていた人々は、黒いアスファルト舗装に白ペンキで塗った縞柄を踏んで道を渡り始めた。

ドライバーはじれた足をクラッチに乗せたまま、いつでも走らせるようにしている。車は前に行ったり後に下がったり、今にも鞭打たれ猛った馬のよう

だ。歩行者は横断を終えたが、信号はさらに数秒のあいだ車の流れをせき止めている。ようやく青に変わり、車はキビキビと走りだしたが、全部が揃って素早くスタートラインを離れたわけではなかった。真ん中の車線の先頭の車が止まっていた」



この時に起こる騒動はどこにでも見られる光景である。ただ違ったことは、このドライバーの目に突然異変が起こったことだった。赤信号が青に変わるのを待っていた時、いきなりぱっと目が見えなく見えなくなった。このドライバーが最初に目が見えなくなった男 (38歳) である。



全てが真っ白に見える。目を開けたままミルク色の海を泳いでいるようだ。ありとあらゆるものが不透明な白に覆われていた。ひどく明るい白の中へ投げ込まれていた。目の前に分厚いのっぺりとした白い色がある。「霧の向こうから太陽が照らしてくれるような眩い白さにずっと囲まれ続けた」輝く光輪の内側で生きることになる。

夜がないようだ。「その白さは、単に色のみならず、まさに生命と人間を、吸い込むというより呑み込んで、それをいっそう見えなくしていた」。

高橋源一郎氏は「白の闇ということは見えている。白いものは見えている。白く輝くものは何か (何を象徴しているか) おそらく、それは社会の構造が見えなくしている。病気にかかる前から見えていないと解説されている。

「社会の構造とは何か」? しかも超近代化された社会の構造とは何か? 見えているようで、見えていない。見えているつもりで生きている。多くの人には見えていなくても生活には当面は困らない。もっとと良く見えるように。

「もっと、もっと」 (more and more) と明るさを追い求めた結果、眩くて見えなくなったのかも知れない。

我々の生活はmost convenientな状態にある

暗闇から突然外に出ると一瞬目が見えなくなる。暫く白い影が残るという体験が私にはしばしばある (参考)

第2章・親切な車泥棒も見えなくなる。そして医師も。 (p24-33)

この慌てふためくドライバーを親切に彼の自宅まで送り届けたのは、貧しいものの弱みつ



け込んで儲けている貧弱ビジネスの片棒を担いでいる。2番目に目が見えなくなる男である。(本文ではこの男の心理描写がある)

最初に目が見えなくなった男は妻に連れ立って眼科医を訪れる。待合室にはサングラスの娘がいた。医師は懸命に38歳の男を診察をる。同僚の医師にも相談するが病名も原因も判明しない。医師は夕食後妻に話す。そして病気を調べるために書庫に入る、書棚に本を戻すときに両手が見えなくなった。医師は感染症ではないかと疑い、厚生省に電話をしたが信用されなかった。(2日目)

第3章・厚生省の対応 (p34-45)

まるで横面を張り飛ばすような横柄な態度だった。数分後して落ち着きを取り戻してから、医者はいかにひどい扱いを受けたか妻に話した。それからもっと早く悟っているべきことを今知ったように、悲しげにつぶやいた。「これがわれわれなんだ。半分は無関心、半分は悪意からできている」

安全な経路で適切な方向に情報を伝えるただひとつの道は、公務員を間に挟まず、医者から医者へ、すなわち自分の所属する病院の院長に話すことだ。官僚システムを大きく動かす責任を院長に委ねればよい。だが、院長も事態を理解できず、厚生省への報告を時期尚早と判断した。しかし、30分後事態は変わった。院長のもとに左目の斜視の少年が失明したと行って母親に連れられてきた。3時間ばかり過ぎたて厚生大臣が動き出した。隔離を即座に実行する。夕方6時頃、厚生省から30分以内に眼科医を隔離するために救急車をよこすという電話が入った。医師の妻は救急車に乗り込み夫の隣に座った。救急車の運転手は振り向いて抗議した。

「男の人しか乗せられません。そういう命令を受けていますんで、降りてください」妻は落ち着いて答えた。「どうせ私も運ばなければならないわよ、たった今、目が見えなくなったから」



第4章・隔離が始まる。(p46-65)

医師とその妻が隔離されたのは使用されていなかった精神病院であった。夫妻が続いて入ってきたのは、③最初に感染した38歳のドライバー、④その人の車を盗んだ男、⑤サングラスの娘、⑥斜視の少年の4人である。この少数の段階でも混乱から秩序を形成することがいかに難しいかを知ることができる。医者の妻は目が見えるが、それを夫以外の誰にも知られないようにリーダーシップを発揮せねばならなかった。



(現実の組織でよくある事象である。
この本はリーダーシップの観点から読み込んでいくこともできる経営哲学書の側面があると私は思っている)

彼らに命令された規則は15あった。
た。

そのとき、大きな声が命令しなれた口調で荒々しくとどろいた。声は人びとが入ってきたドアの上にとりつけてあるスピーカーから飛びだしてきた。「連絡する、連絡する、連絡する」という言葉につづき、スピーチが始まった。政府としては、緊急に権力を行使せざるをえないことを遺憾に思う。今般あらゆる情勢から判断して、失明の伝染病とみられるものが発生した。この病気は暫定的に白い病気（白い悪魔）と呼ばれているものである。かかる焦眉の急に際し、われわれはあらゆる手段を講じて、全力で国民を保護することが責務と考えている。これ以上病気を蔓延させないために、われわれが伝染病と闘っていること、そして、説明のつかない同時発生事件だと手をこまぬいて見ているのではないことを、国民のみなさんによく認識していただき、みなさんの公共心と協力を頼みとするものである。



患者を一カ所に集め、すこしでも患者と接触した感染者（濃厚接触者）を隣接した場所に隔離する。政府はその責任を十分に認識しており、この放送を聞いているみなさんにも同様に社会から孤立した現在の状況が、個人的事情をこえて国中の市町村が結束した結果決定されたものであることに留意していただき、疑いなく高潔な国民として責任を認識されることを期待している。したがって、以下の指示をしっかりと聞くように。

- ①照明はつねに点灯しておくこと。（患者は目が見えない。監視のための明かりである）
- ②許可なく建物から出た者は即刻死亡するものと心得よ。
- ③各病室にはひとつずつ電話があるが、それは衛生上、清潔な物資を調達する際にのみ使用が許される。
- ④収容された患者は衣服を手洗いする責任を負う。
- ⑤病室ごとに代表者を選出することを提案する。これは命令ではなく、提案である。患者は事情に沿うかたちでみずからを組織化し、いま通知している規則に従うようにしなければならない。
- ⑥一日三回、食糧の入ったコンテナが玄関ホールに運ばれる。

右側に置かれるのが患者用、左側に置かれるのが感染者用である。（入れられるものはこの決まった食料だけである。いかなる薬も入れることはできない）

⑦残り物は焼却すること。これには食物だけでなく、可燃性のコンテナ、皿、ナイフ、スプーン、フォークなどがふくまれる。

⑧焼却は中庭、もしくは運動場でおこなうこと。

⑨患者は焼却の火を責任をもって始末すること。

⑩偶然もしくは故意に火災が発生し、消火不能になった場合も、消防隊員は出動しない。

⑪同じく、いかなる病気が発生しても、あるいは施設内で騒乱や暴動が起きても、患者は外部の応援をあてにしてはならない。

⑫いかなる原因であれ、死者が出た場合、患者は儀式をおこなわずに中庭に埋めること。

⑬両翼に分かれた患者感業者の接触は、建物中央にある玄関ホールでおこなうこと。

⑭感業者が突然失明した場合、その者はただちに反対側の棟に移さなければならない。

⑮この伝達事項は新しい患者が到着したらすぐに伝えること。政府と国はすべての男女が義務を果たすことを期待している。おやすみ」 52



この精神病院と収容患者、感染者を管理するのは陸軍の特命を受けた分隊であった。まだグループは6人であったが、医師の妻は、個性の異なる、利害の異なる失明者の世話をすることが、どれほど大変であるか。罵り合い、痴漢行為と反撃と負傷等々。医師の妻は「なれるものなら失明したい」と願った。

第5章・午前5人、午後3人が入居する (p66-88)

次の日には左棟の感染者棟から男が3人（⑦警察官、⑧タクシー運転手、⑨薬局の助手）

女が2人（⑩ホテルの客室係、⑪最初に失明したドライバーの妻）が、隣の感染者棟から失明して移されてきた。この5人と既に隔離されていた6人とは微妙な関係があった。



「医者（医師）の妻はここに来て初めて、覗かれているとは夢にも知らない様々な人間たちの振り舞いを、顕微鏡でじっと観察しているようだと思い、はっとした。これは卑しむべき汚らしい行為ではないのか。他の人々に私が見えないなら、私にだって見る権利は無いと医師の妻は心の裡でつぶやいた」

更に午後3人、左棟の感染者棟から⑫眼科医に勤務していた男性、⑬サングラスの娘に関係のある男、⑭不作法な警官、これらの人も、既に隔離されていた11人と絶妙の関係にあった。14人となる。

1週間もするとこの場所はどうなるだろう、そして1週間後もまだ拘束をされているところを想像してぞっとした。それに衛生上の問題をどう解決しよう。自分たちの体をいかに清潔に保つとか、便所が1つでも詰まったらこの建物は下水道に変わるだろうと医師は自問した。

目が見えない人々には時間が意味を持たなくなった。空腹以外には。時計を巻く人がいなくなった。医師の妻以外は。(p77.ここで展開される生活は、目が見える世界と同じように、醜い状況が続く。その無秩序の中でのリーダーの役割はいかにあるべきかが模索される)

そのような14人のグループでも個人の特性(人格と行動)は自由に発揮された。喧嘩があり、不慮の事故があり、兵士に射殺され、その一人の死体を目が見えない人が埋葬する。これから外の世界で起きるパンデミックの現象を予感させる事件が続いた。

作者の意図がどうかは分からないが、原因がなんであれ死者を埋葬する場面では人々が宗教心を持ち一致している。

6章・死者を葬る(p89-106)

この章は哲学的考察が多くある。目が見える左の棟にいる感染者(濃厚接触者)と右の棟にいる目の見えない人々との食糧をめぐる争い。感染者はいずれ右の棟に移されていくのだが。これらを監視する兵士と軍曹との動き、これらの人も感染するのは時間の問題であったのだが。

医師の妻は、もし目が見えることが知られたら?その結果を想像すると耐えられなかった。少なくとも誰もが彼女を意のままに使おうとするだろうし、最悪の場合、1部の人々の奴隷にされることもあり得る。

しかし、彼女は目が見えない人に悟られないように注意深くこのグループを助け続ける。

医師は言う「人が獣になる多くの道がある、これはその筆頭に来ることだ」

これは? p106を参照。

7章・260名の患者が入ってくる。(p107-127)

隔離4日目

食糧がなければ生きていけないのだから、われわれに食事が届くかぎり、ここはホテルと同じである。反対に、市中にいる病人は、なんとつらいことだろうか。街路をよるよると歩き、その姿を見るとだれもが逃げ、家族はあわてふためき、近づくのを見るだけでゾットとする。(中略)政府は、失明した人同士をひとつにまとめることに決定したとき、すばらしい洞察を示したといっても過言ではない。類は類でかためる。いっしょに暮らさざるをえない人びとにとって、それは賢明なルールだ。

私たちは新型コロナで感染した人々から多くの教訓をいただいた。彼らは私たちに代わって苦しみ、私たちに代わって不便に耐え、ある人々は亡くなって逝かれた。それは小説の

世界ではなく紛れもない現実であった。幸いにして新型コロナでは失明する人はなかった。

そして作者は病棟に戻ってくる。

また病室のいちばん奥にいる医者、われわれは組織をつくるべきだという意見もまさに正しい。まず食糧、それから組織、このふたつは人が生きていくうえで不可欠である。

問題なのはそうした組織が、多くの信頼できる男女を選び、彼らに仕事を与え、この病室でわれわれが共生するための納得できるルールを確立するかどうかだ。たとえば、床を掃き、整理整頓をし、洗濯をおこない。ベッドがいつでも整えられているようにするルールである。だいじなのは、わたしたちが自尊心をなくさないこと、そして、わたしたちを警戒し、監視しつづげる任務しか与えられていない兵士と争いを起こさないことだ。これ以上の死者は出たくない。

夜、わたしたちを楽しませたいと思っている人を募りお話、寓話、逸話、なんでもいいから語ってもらう。もしも聖書をそらで憶えている人がいて、天地創造からの物語をずっとたどることができたら、なんと幸運なことだろう。大切なのは、わたしたちがたがいの声に耳をかたむけることだ。

このような平穏な話し合いがもたれ、組織的な秩序が形成し始めたとき、突然に、軍隊が総計260名の患者を、この病棟に送り込んでくる。

それだけの人数をいったいどこに収容するつもりだ。失明者用の右側の棟には病室が3室あるだけだし、収容可能な人員は120名と聞いている。すでに60から70名が収容されており、われわれが殺さざるをえなかった10名程度を引いたとしてもベッド数が足りない。



かくして軍隊が取った措置は左右の病棟

の区別をなくすることであった。すなわち、濃厚接触者と患者を一緒にすること。理由はいずれ近いうちに全ての収容者が患者になるから。ベッド数は240あった。20名が床に寝ることになった。

第8章・260名のリーダーシップと老人の参加 (p128-145)

かつて精神病院であった閉ざされた社会の中で生活せざるを得なくなった人々の数が急激に増え、空間も広がったといえ接触密度は濃くなった。これらの人々を監視する兵士たちも次々と失明し管理するものが少なくなり、食糧の供給量も減退していった。260名の収容者たちは左の棟、右の棟それぞれ3病室に押し込まれた。

ここで著者は、最初に収容された第一病棟について次のように記している。

第一病室について言えば、おそらく患者が収容されたのがいちばん古く、そのため目の見えない状態への適応と手順がもっとも確立していたので、同室の仲間が食事を終えた15分

後、床に落ちている汚れた紙屑や、忘れた皿、あるいは汁のついた容器といったものは、たいして残っていなかった。

ゴミは小さなものを大きなものに入れ、汚いものをより汚れの少ないものにくるむなどして全部集められた。合理的な衛生上の規制をみたしていたし、残りものやゴミを集める際のもっとも効果的な方法という点でも、この作業を実行するのに必要な労力を節約する面でも、行きとどいていた。こうした社会性をもつ行動をとる精神の在りようは、一朝一夕につくれるものではないし、ましてや自然発生的に生まれるものでもない。このケースを細かく見てみると、病室のいちばん奥にいる女による教育的はたらきかけが決定的な影響を及ぼしたようである。この女は眼科の医者と結婚しており、つねにこう語って倦むことがなかった。わたしたちがどうしても人間らしい暮らしができないなら、少なくとも動物的な暮らしにならないように力のかきり頑張りましょう。医者の妻はその言葉をたびたびくりかえしたので、同じ病室の人びとはついに彼女の助言を、処世訓や金言、あるいは主義や人生の原則だと思ふようになった。心に深く沁みいったその言葉はとても簡潔で基本的なものだった。おそらくそれは、必要なことやさまざまな事情を理解する点で好都合な、たんなる精神の在りようだった。¹³⁰

このフレーズを冷徹に経営の側面から見ると、どのような集団にあってもリーダーの存在が必要であり、そのリーダーには尊敬される資質がなくてはならないことを端的に語っている。その信頼された人格の影響によって集団の精神的な雰囲気形成される。親しみのある言葉で言えば素晴らしい企業文化の醸成である。この企業の精神的な雰囲気がリーダーと有機的に結合する時、組織は本来の、人間のための力を発揮する。

このような精神的な雰囲気のある集団の特徴を作者は、更に筆を進めている。

そのおかげで、黒い眼帯をした老人が病室のドアからのぞいてベッドは余っていませんかと人びとに尋ねたとき、ささやかではあったが温かい歓迎を受けたのである。じつはこの物語のつづきをはっきりと暗示しているのだが、さいわいなことに偶然空きベッドがひとつだけ残っていた。どうして残ったのか、だれもがいぶかしく思うに違いない。それは車泥棒が筆舌に尽くしがたい激痛に苦しんだベッドだった。たぶんその苦痛の霊気がまだ漂っていて、人びとを遠ざけたのだろう。こういうことは運命のなせる業、神秘の謎である。

この空きベッドは、以前にある事件で死亡して、グループの人々の宗教心によって丁寧に葬られていた。何故、空いていたか。作者と違う解釈をすれば、グループの人にとってはその空きベッドの男を忘れてならない思いがあったのではないか。

この第1病室に加わった「黒い眼帯をした老人」昨日失明したばかりで市中で起こっていること、情報を持っており、それを話し出すのである。この老人も医師の患者であった。

老人の話はこれからの読者の権利を侵害することになるので記述ができない。

ただ一つを記せるとすれば「この後失明者が容赦なく増加してくると、政府の有力者たちは、公の指導力では問題に十分な対応ができないことや、国庫に経済的負担がのしかかることを恐れて、失明者を家庭内に監禁し街路に出してはならないと言う案に飛びついた」



「黒い眼帯をした老人」の市中で起こった事象を聞いた医師は「多分目に見えない人の世界の中でだけで、物事は真の姿になるんでしょね」と呟く。

作者は徹底して、患者の立場で物語を進める。カミュの「ペスト」は患者の視点ではなくペストと闘った人を描いている。カミュが描けなかった患者側の視点に立った世界の深層に鋭く迫る。

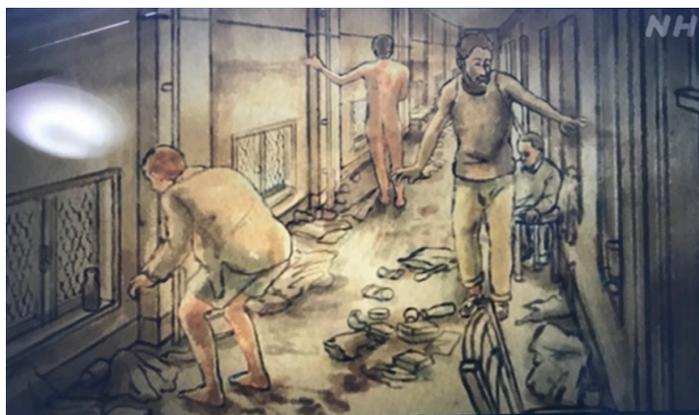
あたかも今の世界の人々に向かって語る。長がい物語の中の所々に短い文で哲学的思索がある。

黒い眼帯をした老人」の次の言葉もその一つである。

「私が失明したのは、見えない眼を見た時です。からっぽの眼窩が炎症を起こしているみたいに熱かったので、理由が知りたくなくて眼帯をはずしました。その瞬間に失明したのです」聞いていたある男が「寓意があるなあ。己の不在を認めない眼」という訳ですね。

第9章・便意との闘い (p146-174)

ぎゅうぎゅう詰めにした260人の人々の患難の生活が始まる。一人ひとりに厄介な便意とその処理の問題。入れることと出すこと、新陳代謝は生命維持の本能的な作用である。その上に組織の問題、元来組織は秩序を求めて効率的で有機的な活動のためにあり、又、造られるものである。



左棟の第3病室の中に銃を持った悪党が

いた。すぐに20名子分にして、食糧の独占を始めた。指輪、ネックレス、時計等かつての世界では換金可能な品物との交換を要求してきた。執拗に2度も検査をする。

第10章・戦争と性暴力・強制収容所 (p175-201)

それでも飽き足りない彼らは肉欲に駆られて食糧との交換に「女性を差し出せ」と要求してきた。この章は日本の満蒙開拓団の接待所の光景、更に敗戦後満州から安全に帰国するためにソ連兵に差し出された女性たちの陵辱と恐怖、そして男たちの無責任さが再現されているかのようである。戦争と性暴力が描かれている。女たちが行くことを決めた前夜の

右棟第1室で起きていたことはここでは書くことができない。悲しみとか哀れとか惨めとかどんな言葉も見出せない。



次の日の夕がた「私が先頭に立つ」と言ったのは医者妻であった。

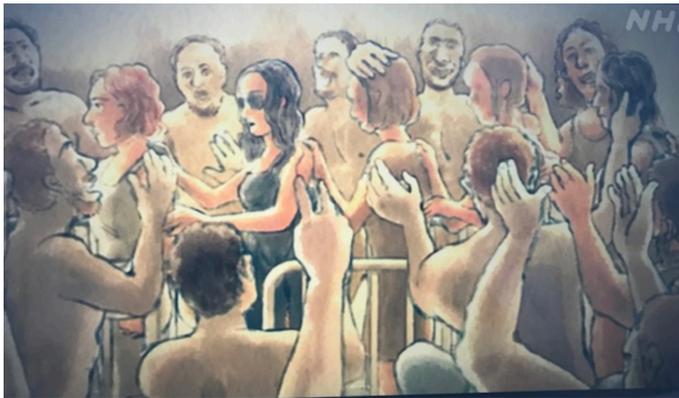
「サングラスの娘は医者妻の後ろについた。その後ろにホテルの客室係、眼科の受付係、最初に失明した男の妻、だれも知らない女、しんがり

りに不眠症に苦しむ女がついた。中略。私たち、1分以内に死ねたらその方がいいんじゃない？ どうせ死ぬなら、みんな死ぬんなら。ここに入っている女全部」。としんがりの女が言った。ソ連兵と同じような残酷な陵辱の描写。

7人の女は一晩で4人の男に、ある女は首領の男に複数回、死以上の苦痛を与えられた。

そして、悪党どもが女たちを解放したとき、夜が明けてきた。そして、しんがりの女は死

んだ。「遺体の両腕を抱え起こした。脚は血だらけで、腹には打撲傷があり、小さな乳房はむき出しになり、無残に傷つけられ、噛みつかれた肩には歯型が残っていた。これは私の体だと医者妻は思った」。作者は人が死んだとき、なぜ死んだかと問いかけるのは愚かなことだ。原因はやがて忘れられ、死んだ、という言葉だけが残されると追記している。



第11章・女たちの復讐と首領の交代 (p202-235)

第2病室の女が餌食になっているとき、首領が交代する事件が起きた。新しい悪党の頭は会計係をしていた男で、白い病に罹る前から失明していた。盲人の技術を身につけていた。この章では満蒙開拓団が本国に帰国して、彼らが懇願してソ連兵に差し出した接待係の女性を罵ったのと同然の成り行きが展開されている。弱者の弱者いじめは今も変わらない。第二回目の復讐戦の最中に「私は目が見えている」と告白する。228

戦いは惨憺たる敗北に見えたが、右棟の第2病室の「ある女」の中に気力が芽生えた。私たちは強者が弱者の口からどれほど残酷にパンを奪ったかを目撃している。個人は全員のため、全員は個人のため。彼女は手荷物の中にタバコの



ライターを持っていることを思い出したのだ。

「白い闇」356ページの本である。章付も目次もないが、ここ236ページを境にして前半と後半に分けることができる。前半は強制収容所を思わせる隔離と監視と暴力の中での目の見えない人たちの生活、混乱と秩序形成、リーダーシップのあり方、そして人間の心理がえぐられていく世界であった。

第12章p236から後半で、強制収容所から自由になって市中に出での生活である。

目が見えない人々が自由で解放された世界にどのようにして生きていくことができたのであろうか。

第12章・解放された世界を彷徨う (p236-259)

目の見えない人に、あなたは自由だ、世界を隔てていたドアをあける、と言ってみる。さあ行け、あなたは自由だと。目の見えない人は行こうとしない。道のまんなかで身動きもできずに立ちつくしている。彼だけではない、ほかの人びとも。みんなが怖がっている。どこに行けばいいのかわからない。そもそもが精神病院という合理的な迷路で暮らすのと、導き手なしに、あるいは犬の引き綱を持たずに、秩序をなくしたこの町の迷路へ危険を冒して進んでいくのとは、くらべようがないほど違うというのは事実である。町では記憶が役に立たない。記憶はたんに場所の景色を思い浮かばせるだけで、そこに至る小道を知っているわけではないからだ。すでに端から端まで燃えている建物の前に立ち、患者たちは火炎から吹いてくる熱波を顔に感じていた。彼らはそれがあある意味で自分たちを守るものだと受けとめていた。以前、壁がそうであったように。かつての監獄や避難所のよう。人びとは家畜の群れのように身を寄せ合っていた。探しにくる羊飼いがいないことを知っていたので、迷子の羊にはなりたくないという心理だった。

火勢はしだいに衰えはじめ、月光がふたたび冴えはじめた。患者たちは不安をおぼえてきた。ここにはとどまっていられない。一人が言ったように、永遠にいまは昼なのか、夜なのか。

夜が更けるとともに空気が冷えてきたが、焚き火にするような木はたいして残っていなかった。焼け跡の燃えさしから流れてくる熱気も、患者たちを温めるほど強くなかった。人びとは精神病院の門からかなり遠いところで寒さに震えていた。医者やそのグループもそうだった。三人の女と少年をまんなかにし、それを三人の男がぴったりと囲んですわっていた。これを見た人は、だれしも彼らがこの姿のまま生まれたのではないかと言っただろう。それほど彼らは体をひとつにし、息をひとつにし、飢えをひとつにしている印象を与えた。

目の見える女を先頭にし、その後に目の見えない人々が肩に手をかけて1列になった。2番目はサングラスの娘、次は黒い眼帯の老人、斜視の少年、最初に失明した男の妻、その夫、最後に医者がついた。グループの通った道は街の中心部に向かっていった。

街に目が見える人は一人もいなかった。人々は皆、食料を求め、街の道路は糞便だらけで臭気が漂い。野に放たれた野獣の群れとなっていた。

医師の妻の姿

通りに出ると、どしゃぶりの雨になっていた。そのほうが好都合だ、と彼女は息を切らしながら思った。脚はがくがく震えていた。この雨のなかなら、匂いもそれほど注意を惹かずにすむ。かるうじて腰から上を覆っていたボロボロ布がだれかに引きちぎられて、彼女はいま乳房をむきだしにしておりそれが天からの水のおかげで濡れ光り、優雅で上品なたたずまいを見せていた。これは民衆を率いる自由の化身ではなかった。

目の見えない人びとは口をあけて天を仰いでいた。喉の渇きを癒し、体のくぼみや奥まった場所に水を受けていた。渇いた人びとに神が雨雲をもたらしたのだ。

医者妻は、家の蛇口から貴重な水が一滴も出ないという可能性に思っていたらなかった。これが文明の欠点というものである。わたしたちは各戸に引かれた水道管から水が出る便利さに慣れすぎて、つい、不足を調整し、貯水池を管理するコンピューターと、電力を必要とする取水塔のポンプのこと、そして水源のバルブを開閉する人びとがいることを忘れていた。こうした操作は、眼を使ってするものだ。

現代文明は目の見えることを前提にしている。業務は分担されている。分業による協業で便利さを共有している。

第13章・サングラスの娘の家に着く (p260-292)

医師の妻のリードで彼らはかつて住んでいた我が家を訪問したいという。

最初に訪れたのはサングラスの娘の家であった。次に医師の家に向かうことになるが、道中、彼らを悩ましたのは空腹以上に便意であった。

事実、あまり人が認めたくないことだろうが、この嫌悪すべき人生の現実はまだ考えておかねばならない。腸の調子が普通なら、皆にも考えが湧き、例えば眼と感情には直接の関係が存在するのとか、はっきりとした視力があれば責任感覚が自然に備わってくるものか等と論議することができるだろう。だが猛烈な下腹部の痛みと苦しみにさいなまれると人間の動物性は極めて露骨に現れる。

この現象はすでに隔離生活でも嫌というほど体験していた。環境が変わってもこの生命の新陳代謝の問題は目が見えない人々には耐え難い苦痛であった。

一日食糧を求めて歩き回った後

昨日のような豪雨があれば、もう一度、こんどは恥も外聞もなく裸で裏庭に出て、頭に、肩に、空から降る気前のよいシャワーを受けたことだろう。雨が背中を、胸を、脚を、流れ落ちていくのを感じる。両手を合わせて水を受け、最後に体をきれいに洗い、手にすくった水をだれかに差しのべて渇きを癒すのだ。だれの手にもだれの唇がさわるかなど、どうでもいい。おそらく唇は、水にふれる前にその皮膚にそっとふれる。喉は絶望的に渇いている。きっと手のくぼみを最後の一滴まで舌で紙めつくすだろう。

その食卓で、医者の妻は考えていることを話した。

「私たちがしたいことを決める 때가来たようだわ。すべての住民が失明したのはまちがいない。少なくとも、これまで人びとの行動を観察したかぎりではそういう印象を受けた。水道も、電気も、公共で供給されるものはすべてとまっている。いわば、社会は無秩序状態とっていいし、これこそ混沌という言葉の意味そのものね」

「政府はあるんじゃないか?」と最初に失明した男が言った。

「分からない。でも、政府があったとしても、目の見えない人を支配しようとする目の見えない人の政府になるでしょうね」

「無に秩序を与えようとする無のようなならば、未来はないですな」と黒い眼帯の老人が言った。

「未来があるかどうかは分からないけど、今、大事なものは、どうやって現在を生きていくかよ」

「もし未来がなければ、現在に目標など持てません。まるでそれが存在しなかったかのようになります」

「たぶん、眼がなくても人間性はどうか生きのびるだろうけど、でも、それは人間性ではなくなるわ。結果は目に見えてる。以前自分たちが人間的だと思ってきたように、自分たちのすることを人間的だと考えるのよ」 中略

「一緒にいれば、私たちは生きのびられるかもしれない。ばらばらになれば、群衆の渦に呑まれて死ぬことになる。きみは目の見えない人びとがグループを組織してると言ったね」と医者がたずねた。「つまり、新しい生き方が創られているんだ。きみは死ぬと予言するけど、かならずしもそうとはかぎらないんじゃないか」

(医師の妻)「でも、彼らが現実にとどこまでまとまっているか、分からないわ。食糧と寝る場所を探してるところしか見てないもの」

「われわれは原始的な遊牧の民に戻るんでしょうな」と黒い眼帯の老人が言った。

「ただ、われわれが広大な手つかずの自然のなかにいる数千人の男女ではなく、追いたてられ、疲弊した世界にいる数億人だという違いはありますが」

「しかも目が見えない」と医者の妻がつけたした。「水や食糧を見つけるのが困難になりだしたとき、そういう集団はばらばらになるわ」

(最初に失明した男)「人はそれぞれ一人でいるほうが生きのびやすいと思うでしょうね。分配せずにすむし、手にした物はすべて自分のものにできるから。

移動する集団にはリーダーがいるんじゃないか?命令を出し、物事をまとめる人間が」と最初に失明した男が言った。

「おそらくいるでしょう。でも、命令を出すほうも、受けるほうと同じく目が見えないのよ」

「あなたは目が見える。だから、命令し、私たちをまとめる人はあなたしかいない」とサングラスの娘が言った。

「私は命令するんじゃなくできるだけ物事を整えてるの。あなた方が持たない眼のかわりをしてるだけよ」

。「一種の自然なリーダーですな。目の見えない人びとの国の、眼を持つ王様です」と黒い眼帯の老人が言った。

「そういうことなら、目が見えるあいだは私の案内にまかせて。そこで提案するのは、彼女は彼女の家、あなたはあなたの家というふうに散りぢりばらばらになるかわりに、一緒に暮らしをつづけることなの」

「ここを家にすればいいじゃない」とサングラスの娘が言った。

「うちのほうが広いよ」と最初に失明した男が口をだし、

「ただし、ほかの人びとに占領されてなければね」とその妻が補足した。(中略)

老人が「ひとつ条件があります」世話になっていながら条件をつけるとは一見不届きのように思われるが、一部の老人にはありがちなことで、わずかに残っている自尊心をそれで埋め合わせているのである。

「どういう条件です?」と医者がたずねた。

「わたしがどうしてもないお荷物になったら、かならずそう言ってもらいたいのです。もしも、友情や憐れみから、あなた方が黙っていたくなくても、必要なことをする判断はわたしにまかせてほしいということです」

「それはどういうこと?」教えてほしいわ、とサングラスの娘が問いただした。

退場ですよ。メンバーからはずれ、消えるのです、ゾウはそうするものだといいますが、最近聞いた話では、ああいう動物は老齢にも至らないそうですね」

「あなたはゾウと同じじゃないわ」

「わたしは人と同じでもありません」

「とくに、子どもつぼい返事ばかりするときはそうね」とサングラスの娘は怒った。会話はそこで終わりになった。

(この引用はあえて会話式に構成してカッコをつけた。原文には段落もカッコもない。読者は誰の発言か自動的に判断していくことになる文体である。サラマーゴの独特の形だと言われている)

政府機能も軍隊も壊滅的になって無政府状態となっていた。

ここで、時間を少し戻して経済界の話の一つ紹介しておこう。

ある会長の運命

高層ビルがたちならぶ大通りを進んでいた。このあたりの自動車は大型で居心地のよさそうな高級車ぞろいなので、大勢の人びとが車内で眠っているのもうなずけた。実際、巨大なリムジンはどう見ても永住型住宅に変貌していた。おそらく家に戻るよりも、車のほうが戻りやすいからだろう。この車の入居者は、収容所にいた人びとがベッドを見つけるときにしたように、街角から車の台数を数えながら手さぐりで進んでこなければならない。通りの右側、二十七番目、いま帰ったよ、ということになる。リムジンがとまっているのは銀行の建物の前だった。毎週おこなわれる本会議のために、取締役会長を送りとどけてきた車である。白い病気の流行が宣言されてから初めて開かれる会議だったが、会議が終わるまで車を入れておく地下駐車場にもたどりつけなかった。運転手の目が見えなくなったとき、会長はふだんどおり正面玄関からビルに入るところだった。彼は叫び声をあげた。この彼とは運転手のことであるが、彼は(これは会長のことであるが)それを聞いていなかった。しかも、この数日間で数名の重役が失明していたため、本会議の出席者数はその名称にする要件をみたすものではなかった。しかも会長は会議を開くことがで

きなかった。その日の議題は、重役とその補佐が全員失明したらどういう対策をとるべきかというものだった。会長は会議室にも入れなかった。会長を乗せたエレベーターは十五階をめざしたが、正確に言えば九階と十階のあいだで電気の供給がストップし、最後まで復旧しなかった。災害はけっして単独で起きるものではない。もとはといえば、同時に電気技師たちの目が見えなくなったのであり、彼らは国内の電力供給の維持と、ひいては発電機の保守管理をまかされていた。これらの発電機は旧式のモデルで、自動式ではないため長年交換が待たれていた。その結果、さきほども言ったように、エレベーターは九階と十階のあいだで停止することになった。取締役会長はエレベーター係の目が見えなくなるところを目撃し、彼自身は一時間後に失明した。電気は復旧せず、その日銀行内で起きた失明件数は増加した。二人はたぶんいまもそこにいるだろう。もちろん鉄の棺桶に閉じこめられた死体としてだが、そのかわり、さいわいにも貧欲な野犬に食われることはなかった。

各銀行には人々が殺到した結果、主要銀行が1日にして破産寸前に追い込まれた。現金自動支払機は電源が入ったままの機械の画面には「当行をご利用いただき誠に有難うございました」という不可解なメッセージが映っていた。（電源は自家発電に切り替わっていた。公共の電気供給はすでに終わっていた。現金自動支払い機の度重なる事故は文明が最も発達した国でも発生していることは我々の記憶に新しい）

第14章・医師の家に到着 (p293-320)

陽が傾いた頃、グループは医師の自宅に到着した。医者妻は全員に全ての着衣を脱ぐように命じた。

医者妻は床にちらばった衣類を集めた。ズボン、シャツ、上着、スリッパ、ブラウス、汚れきった下着。下着は前に彼女がきれいにしてから最低ひと月はたっていた。

夜が明けたとき、雨が降りはじめた。激しく窓に吹きつける強風のせいで、乱れ打つ鞭のような音をたてていた。医者妻は眠りから覚め、眼をあけてつぶやいた。あの雨音を聴いた？。それからまたまぶたを閉じた。室内はまだ闇夜のように暗く、まだ眠っていた。だが一分ももたず、なにかをしなればと思っただけで眼をあけた。それがなにかはわからないが、雨は彼女に言っていた。起きろ。雨がなにを望んでいるのだろう？

空全体がひとつの大きな雲に覆われて、どしゃぶりの雨になっていた。バルコニーの床には彼らの脱いだ汚れた衣類の山が積んであり、洗うつもりだった靴を入れたビニール袋があった。洗う。眠りの最後のベールが破られた。しなればならないのはそれだ。中略
精神のこの耐えがたい汚穢を少しでも、ほんとうにわずかでも、洗い流せるものならばどんなものでも使いたい。体の汚れだ。衣類と体を同時に洗い始めた。303

これ以上の引用は読者の権利を奪う。おそらくこの著作で最も美しい「三女神の舞」とも言える光景が見える。

この章にきて初めて時間が戻った。隔離所に入ってから最低1ヶ月は経っていたと作者は書いている。私は日数を気にしながら読み直し物語は全体で40日と予想していた。

後、10日間の寓話が続くだろう。

はっきり言って、為政者で国民に目が向いていた人が何人いたであろうか。
今この時、即ち、2022年2月中旬、世界は新型コロナ禍にある。一つのパンデミックの中にある。その渦中でオリンピックが二つもあったし、続行中である。そして戦闘の危機感を煽る外交が行われ、株式が大衆心理を現している。恐怖と不安と無力感を抱きながら、目先では平穏のような生活ができている。
私たちは見えていな。被造物であるということ。

著者の宗教観は私には分からない。末尾の文章と表紙後付けを再読してみたい。

「どうして私たちは目が見えなくなったのかしら。」

「わからない。いつかわかる時が来ると思うが」

「私の考えを言ってほしい？」

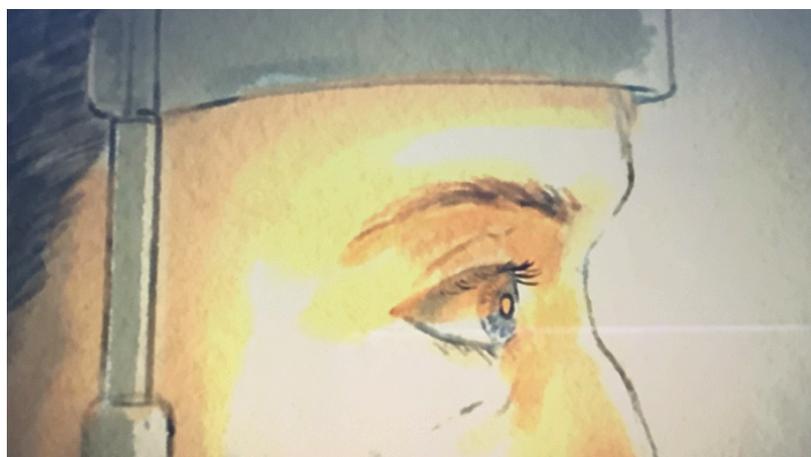
「言ってくれ」

「私たちは目が見えなくなったんじゃない。私たちは目が見えないのよ。」

「目が見えないのに、見ていると？」

「目が見える、目の見えない人々。でも見ていない。」

「見えるなら、よく見よ。よく見えるなら、じっと見よ」



参考文献

- 1、NHK・ET2022年1月3日放映、2月5日再放送、NHK on demand
「100分でパンデミック論」
- 2、「告白」（岐阜黒川満蒙開拓団73年の記録）NHK・ETV特集取材班 川 恵美著
かもがわ出版

次ページから「パリ通信」です。

パリ通信・第122

春を告げる黄色い花々

2月14日はバレンタインデー。フランスでも商業色が濃い行事だが、花束やチョコレートを贈る楽しい時である。2月2日「聖燭祭」(クリスマスから40日後、イエス・キリストの誕生を告げるために神殿に詣った日)のクレープを食べる頃から今年のパリは暖かくなり、2月も中旬になり日が少しずつ延びて春が近くなってきた。



早咲きの桜がつぼみ、黄色い水仙の花が開き始めた。南仏では青空に輝かしく映える黄色いミモザの花が咲き、マントンでは「レモン祭り」が再開(期間は2月12日から27日までの2週間)された。例年20万を超える人たちが地中海の黄色い春を訪れる。マントンから30km離れたニースでも今年

はカーニバルが開催されている(期間は2月11日から27日まで)。コロナ禍で2年連続中止が続いてきた春のイベントがようやく戻ってきた喜びは大きい。フランスの冬休みと重なり多くの人たちに楽しんで欲しいと思う。



写真上は「マントンのレモン祭り」
右はニースの海岸。



フランスの学校制度

フランスは学校を三つのゾーンに分け、

Aゾーン(ブザンソン、ボルドー、クレールモンフェラン、グルノーブル、リモージュ、リヨン、ポワチエ)、

Bゾーン(エクス・マルセイユ、アミアン、カーン、リール、ナンシー・メッツ、ニース、オルレアン、ランス、レンヌ、ルーアン、ストラスブール)、

Cゾーン(パリ、クレティユ、モンペリエ、トゥールーズ、ヴェルサイユ)、

冬休み期間はAゾーン: 2月12日から2月28日、Bゾーン: 2月5日から2月21日、Cゾーン: 2月19日から3月7日である。子供達が学校へ行かない冬休みはコロナ禍対策にとっては嬉しい追い風、集団感染を回避できる絶好の機会である。

4回目のブースター接種は行わない

12月末から急激なオミクロン感染拡大が続き、1月には一日の新規感染者が50万人を超えた。その数字もようやく10万を下回り、13日には86000人となった。病院の集中治療室を占めるコロナ重症患者が減り、第5波が終わりに近づいた。2月末には屋外でのマスク着用義務が解除される。新たな変異株が生まれる可能性がないわけではないが、4回目のブースター接種はしないと発表された。

テレワーク優先の在宅勤務からオフィス出勤勤務へと移行し始めている。楽観的かも知れないが、コロナ禍の終息という明るい未来が少し見えてきたように思う。

そして、日照時間が短く、曇り空ばかりで明るい日差しに恵まれないパリの冬に疲れ、春を感じる暖かい太陽が輝る日にはどこからともなくそぞろ歩きを楽しむ人が増えてくる。



陽の当たるセーヌ川岸を散歩したり、ジョギングしたりする風景が戻ってきた。セーヌ川の水位も今のところは1,5m前後に安定している。3月上旬まではアジュール・フロタン「ルイズ・カトリーヌ」号の安全繫留を最優先にオステルリッツ駅前の川岸まで往復を続けている。

解決しないセーヌ川の汚染

岸の近くまで行かないと分からないがセーヌ川にはいろいろな物が流れてくる。木の幹や小枝は仕方がないと思うが、ゴミの量が半端ではない。ペットボトル、ビン、缶、プラスチック容器、段ボール箱に詰まった服や布、お弁当箱、生ゴミなどが船と岸の間のスペースに所狭しと溜まっている。毎回ゴミ拾いが一仕事である。水を吸っているので引き上げるのが大変だ。先日はなんと小型冷蔵庫と牛の死骸が流れ着き、水上保安官に処理していただいた。パリ市内を流れるセーヌ川の水は汚い。日本の清潔感までは望まないが、もう少しゴミを捨てないように心掛けて欲しいと思う。岸にも割れたガラス瓶のかけら、使い捨てたマスク、食べ残りの食品、プラスチックゴミが



散乱している。地域活動としてゴミ拾いを始めたところも出てきたが、パリには本当に沢山のゴミが至るところに捨てられている。イダルゴ・パリ市長は2024年夏のパリ・オリンピックでは「トライアスロン」(水泳、自転車ロードレース、長距離走)でセーヌ川を泳ぐと公言している。シラク大統領時代からパリのセーヌ川を泳げる川に戻すと言われ続けてきた。魚もいないことはない。沈んだアジュール・フロタンを浮上させた時には船内に3匹「ナマズ」が棲んでいた。しかし未だに汚水を流しているボートハウスも珍しくないセーヌ川が2年で泳げるまでに回復するのは極めて難しいと思う。泳げないにしても、オリンピックを機にゴミを捨てない清潔なパリになって欲しい。(古賀順子記)

参考記事

パリのセーヌ川で水質改善計画が進行中だ。1923年に市民の遊泳が禁止されてから、ほぼ1世紀。過去にも汚名をすすごうとしたことがあるが、挫折を味わった。2024年のパリ五輪の競泳会場に決まったことで、今度ばかりは後に引けないようだ。パリ市が水質の改善に取り組むのは、実は今回が初めてではない。

パリ市はシラク市長(後の大統領)時代の1984年、「10年後のセーヌ川は、ほぼ澄んだ状態で流れることになる」と断言。シラク氏も90年に、「3年後にきれいなセーヌ川で私が泳ぐ」と公言したが、実現しなかった。

そんなセーヌ川が、2024年のパリ五輪では、トライアスロンや10キロのオープンウォーター(野外の競泳)の会場に決まった。パリのイダルゴ市長は、「泳げるセーヌ川」にすることを市民に約束。24年に向けた行動計画を練っている。

五輪と競技会場をめぐっては、20年東京五輪のトライアスロン会場となった東京都港区も、水質改善に取り組んでいる。パリ市は今年5月、「泳げる水質」をどうすれば実現できるかヒントを得ようと、港区と協定を結んだ。(朝日新聞デジタル版)